

平成 29 年 6 月 17 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380163

研究課題名(和文) イランにおける民主化・ポスト復興主義運動と経路依存性の研究

研究課題名(英文) Democratization, Postrevivalist Islamism, and Path Dependence in the Islamic Republic of Iran

研究代表者

松永 泰行 (Matsunaga, Yasuyuki)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：20328678

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、総体として非民主的と見なさざるを得ない政治体制でありながら、大統領や国会議員などの選出に当たり、競合的な選挙を定期的を実施して来ているイラン・イスラーム共和国体制において、その競合的な選挙の背景と意義を、ペルシア語資料と現地調査に基づき、比較民主化過程研究の観点から分析した。研究の主な成果は「イランにおける制度的弾圧と一般国民 抑圧的体制下の争議政治としての競合的選挙」という論考に纏め、共著本の分担執筆章として最終年度に出版した。

研究成果の概要(英文)： Drawing on a variety of Persian-language primary data and field research, I examined the origins, and implications for democratization, of a particular brand of competitive authoritarianism that has emerged in the Islamic Republic of Iran since the early 1990s. I published the main findings of the research as a book chapter titled “Institutional oppression and the electorate: competitive elections as a result of transgressive contentious politics” in 2016.

研究分野：比較政治学(比較民主化論、比較政治体制論、争議政治)、イスラーム国家論

キーワード：権威主義体制 競合的選挙 民主化 イラン イスラーム革命 イデオロギー ホメイニズム 体制の持続

1. 研究開始当初の背景

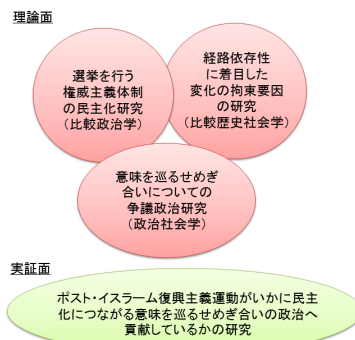
(1) 比較民主化過程研究の視点から、イラン・イスラーム共和国体制下において、「選挙を行う権威主義体制」から「民主的体制」への移行あるいは変容が、いかなるメカニズムおよびプロセスを通じて実現可能になり得るかを考える場合において、本研究がこれまで行ってきた競合的な選挙の特質（例えば実質的な政党が不在な中での競合性の実現）に着目した比較民主化論や、主要な政治主体と政治過程分析に基づく比較政治学的な研究・考察だけでは不十分なままに終わるとの問題意識を持ち、1979年から1989年をイデオロギー的な革命体制の確立を実現した決定的分岐点と捉える経路依存性に着目した新制度論的研究に着手することにした。

(2) イラン・イスラーム共和国体制は選挙を行う権威主義体制である一方で、イスラーム革命を経て成立したイスラーム復興主義イデオロギーを基盤とするイスラーム国家でもあり、その改編に当たっては、単なる選挙を通じた政権交代だけでなく、イデオロギー的な国家が構築した規範や制度がいかに挑戦を受け、あらたなものにより取って代わられるかという側面をも検証する必要があるとの前提に基づき、ポスト・イスラーム復興主義思潮を含む公的主張のせめぎ合いとしての争議政治が果たす役割にも注目することにした。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、選挙を行う権威主義体制としてのイラン・イスラーム共和国体制の民主化過程の研究に、社会科学における新制度論および争議政治の手法と知見を導入することで、イランのイデオロギー的な権威主義体制において、特異な形の競合的な選挙が繰り返し実現されている背景を考察する一方で、根本的（ラディカル）な変革を求める運動とは異なる制度内的改革運動（リフォーミズム）が直面する困難さの理論的および政治的な背景を、浮き彫りにすることを目指した。

(2) より具体的には、方法論的接近法として、非西欧の競合的な選挙を行う権威主義体制（competitive authoritarianism）の民主化過程の研究に、比較歴史社会学や他の社会



科学の学問分野で注目されている経路依存性（path dependence）の知見を導入する一方で、経路依存性を、新制度論の様に決定的分岐点（critical junctures）がいかにその後の制度的変化を拘束するかという問題関心のみで捉えず、争議政治（contentious politics）の主体が、政治・社会的文脈および争議の場に属するとされる文化的な要素を含めた（すなわち、文化・制度的に経路依存的な）争議政治過程、とりわけ社会的場に属する共通理解をめぐるせめぎ合いが、イデオロギー的な革命体制でありながら、競合的な選挙政治も許容しているイラン・イスラーム共和国体制のような政治体制の民主化において、いかに民主化という政治変化へ貢献しうるかをモデル化し、実証的に跡付けることを目指した。

3. 研究の方法

(1) 初年度（平成 26 年度）においては、イランの権威主義体制の維持の新制度論的な検証のための現地調査（6 月）およびペルシア語ニュース媒体・文献（図書・雑誌）資料を中心とする 1 次データの収集を行い、研究のための理論的枠組みと分析モデルの構築のために、Peter Hall を中心とする歴史的新制度論および、Paul DiMaggio 他 の社会学的新制度論の研究業績の吸収を進め、行動主体中心で権力闘争を核とする既存のイラン政治分析の枠組み（「党派政治」(factional politics) 論）に取って代わる、「ホメイニズムの制度的遺産の下で行われる争議政治過程」という分析モデルの構築の一環として、暫定的な研究成果を、10 月の日本オリエント学会年次大会、11 月の日本中東学会公開講演会で報告し、フィードバックを得た。

(2) 第二年度（平成 27 年度）においては、研究のための理論的枠組みと分析モデルとしての「ホメイニズムの制度的遺産の下で行われる争議政治過程」を完成へと近づけるため、4 月にオーストラリア（シドニー大学）で開催された学術シンポジウム（「Cultures of Freedom and Contending Visions of Justice and Governance in the Muslim World」）において研究発表を行い、10 月に英国より若手研究者を招聘し、東京外国語大学で開催した中東・北アフリカ政治社会に関する国際ワークショップ（「TUFS-PCS Workshop on Politics, Religion, and Democracy in the Middle East and North Africa」）において研究発表および議論を行い、精緻化に努めた。同時に、国際会議出席のためにイランを訪問した際に併せて現地調査（10 月～11 月）を行い、また年間を通じイランの権威主義体制の維持の新制度論的な検証のための資料収集として、ペルシア語研究データの収集を行った。また、後述（研究成果）する邦文論文を執筆することで、理論面での研究を進めた。

(3) 最終年度（平成 28 年度）においては、

上述の邦文論考を出版すると同時に、引き続き関連文献および研究データの収集・取り纏めを実施した。その一方で、8月に米国（ワシントン州シアトル市）で開催された米国社会学会の中東分科会において研究発表を行い、フィードバックを得た。また12月にイラン（コム市）において現地調査と研究資料収集を行った。

4. 研究成果

(1) 本研究の中心的成果は、共著本（『途上国における軍・政治権力・市民社会—21世紀の「新しい」政軍関係—』酒井啓子（編）、晃洋書房）の分担執筆章として最終年度の2016年に出版した論考「イランにおける制度的弾圧と一般国民 抑圧的体制下の争議政治としての競合的選挙」に纏めた。その骨子を平易に述べると次のとおりである。

(2) まずレヴィツキーとウェイの「競合的な選挙を行う権威主義体制」という分析枠組みは、民主的な体制を、シュンピーター、ダール、プシュヴォルスキーに代表される手続き的な理解（政治エリート間の競争を国民からの投票で決し、政権担当者の交代が起こるものが民主制であるとの理解）を基礎にするものである。したがって、イランのように終身制の国家元首（最高指導者）が存在する政治体制は、この枠組みを用いた実証研究の対象外とされる。しかしながら、イランにおいては国家元首に次ぐ地位の公職である大統領の選出を巡り、事前の不確実性を伴う真に競合的な選挙が繰り返し実現し、その結果が尊重されてきている（すなわち事後の不可逆性と反復可能性をも伴う競合性が見られる）。したがって、その因果的背景は適切に説明されなければならない。

(3) イランにおける競合的選挙については、さらに不可思議な（puzzling）な点がある。それは、国民が野党の指導者に相当する候補者を当選させる擬似政権交代を起こす際に、野党候補の政策実現（具体的には「改革」の実現）を願望して投票しているとするならば、1997年から2005年までの改革派政権期にいかなる制度的な改革が実現できなかったことを踏まえると、2005年以降の大統領選挙が高投票率の下で競合的になる背景が説明できない。したがって、総体として非民主的と見なさざるを得ない政治体制でありながら、大統領や国会議員などの選出に当たり、競合的な選挙を定期的実施して来ているイラン・イスラーム共和国体制における競合的な選挙の背景と意義は、既存の分析枠組みや比較民主化論における定説とされる議論とは一線を画する説明でもってなされる必要がある。

(4) 本研究の成果は、その競合的選挙の因果的背景は、国民と最高指導者間の争議政治という分析の視座、さらに争議の場およ

び争議政治に關与している主体の相互的なやりとりの動態の双方を拘束する、上位の権力構造（社会学的な新制度論という「制度」化されたイデオロギー的規範）としての「ホメイニズム」、さらにこれが1979年のイラン・イスラーム革命から1989年のホメイニーの死までの決定的分岐点に構築された制度的遺産として、以後の政治過程を経路依存的に束縛しているという視点、を合わせることによって、説明できるとのものである。

(5) 以上の研究成果は、世界的にもユニークな議論であり、今後、英文での学術雑誌論文および研究書として発表する価値のあるものといえる。尚、比較民主化論の観点から本研究の意義は、次の点に纏めることができる。イランにおける競合的な選挙は、選挙を通じた最高執行役の交代という意味での民主化には繋がるものではないが、最高指導者が主宰する国の根幹的な政策へ一定程度民意を反映させる争議政治の道具（例えば、核問題での米国等との外交交渉を最高指導者に強いる手段）としての役割は果たすものであり、その限りにおける民主的な意義を持つものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

松永泰行, 「あの「聖なる防衛」をもう一度か?—イラン・イスラーム革命防衛隊のイラクの対「イスラーム国」戦争支援の背景」『中東研究』, 査読無, 524号, 2015, 64-75.

松永泰行, 「イランの核合意・制裁解除—その意義、背景と余波—」『歴史学研究』, 査読有, 948号, 2016, 17-21, 54.

Matsunaga, Yasuyuki, “(Theological and Institutional Soul-searching Aside) Will Re-problematizing Iran’s Islamic State à la ‘Religious Secularity’ Require Another Islamic State?” *Journal of Religious and Political Practice*, 査読有, Vol. 3, Issue 1-2, 2017, 84-87. DOI: 10.1080/20566093.2017.1292173

〔学会発表〕(計4件)

松永泰行, 「「遺産」としてのホメイニズム再考」, 日本オリエント学会, 2014年10月26日, 上智大学（東京都千代田区）.

Matsunaga, Yasuyuki, “Khomeinism: the Non-Obvious Constraints on Political Reform in Iran,” *Cultures of Freedom and Contending Visions of Justice and Governance in the Muslim World* (an international symposium), 2015年4月9日, Sydney, Australia.

Matsunaga, Yasuyuki, “Religion, Violence, and the Politics of Sanctified Punishment: A Case of Iran’s Islamic State,” American Sociological Association, 2016年8月21日, Seattle, U.S.A.

Matsunaga, Yasuyuki, “Reconciling Islamic Constitutionalism with Pragmatic Governance: What Does the Iranian Experience Offer?” Arab Association of Constitutional Law, 2017年3月24日, Tunis, Tunisia.

〔図書〕(計3件)

Matsunaga, Yasuyuki (Khoo Boo Teik, Vedi R. Hadiz, and Yoshihiro Nakanishi, eds.), Palgrave-Macmillan, *Between Dissent and Power: The Transformation of Islamic Politics in the Middle East and Asia* (Chapter 4 “Islamic Dissent in Iran’s Full-fledged Islamic Revolutionary State” を分担執筆), 2014, 282 (66-88).
DOI: 10.1057/9781137408808_4

松永泰行 (吉岡明子・山尾大 (編)), 岩波書店, 『「イスラーム国」の脅威とイラク』(第7章「シーア派イスラーム体制としてのイランの利害と介入の範囲」を分担執筆), 2014, 290 (247-265).

松永泰行 (酒井啓子 (編)), 晃洋書房, 『途上国における軍・政治権力・市民社会—21世紀の「新しい」政軍関係—』(第13章「イランにおける制度的弾圧と一般国民—抑圧的体制下の争議政治としての競合的選挙—」を分担執筆), 2016, 328 (262-279).

〔その他〕

ホームページ等
(日本語)

http://www.tufs.ac.jp/research/people/matsunaga_yasuyuki.html

(英語)

<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/matsunaga/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松永泰行 (MATSUNAGA, Yasuyuki)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号: 20328678